

貝殻のある風景

熊谷九寿

制作年：1950(昭和25)年

サイズ：91.0×116.7cm

材質：油彩、カンヴァス

所蔵：中津市木村記念美術館

1993(平成5)年中津市に寄贈される。



戦後も国画会展に出品を続けていた熊谷は、その国画会中堅作家の仲間と共に昭和25(1950)年「型生派美術家協会」という研究団体を作り、展覧会を昭和30(1955)年まで開催しました。設立した仲間には同じ大分県出身の宇治山哲平や香月泰男、杉本健吉、須田剋太らがありました。各作家は戦後を迎え、それぞれ新しい表現へと向かいつつありました。宇治山哲平は簡略な図形と明るい色彩による抽象画へと移行する以前、物を幾何学的にとらえ再構成する独自の抽象画を描き始め、戦地から復員した香月は生涯の仕事となった「シベリア・シリーズ」に取り組み始めた時期でもありました。

この「型生派」の展覧会において熊谷がどのような作品を出品していたのかは不明ですが、この「貝殻のある風景」はその頃の熊谷の作風を伝えていると思われます。簡略に分割され塗られた海と空を背景に、赤い砂の上に貝殻が三つ横たわっています。硬質で乾いた貝殻を大ぶりのタッチで堂々と描いています。陽が当たっていると思われる方向からすると、左の貝殻の黒い影にかかる筈の右下の小さな貝が白く浮き上がっていたりと不可解な点もありますが、熊谷が戦前からの静物表現の中でより物質の質感の表現に力を入れている事が伝わってきます。一方では不定形で揺れ動く自然を取り上げて描いていた熊谷が、一方では形あるものに関心を置き、油絵の表現の可能性を探っていたことがわかります。熊谷は昭和25(1950)年の第24回国画会展覧会に「貝殻と魚」「貝殻と裸婦」「貝殻」の3点を出品しました。中津市の「貝殻のある風景」は3つ目の「貝殻」に相当するかもしれませんが、今の所断定できません。